

哲學研究

第百廿七號

第十一卷
第十冊

西田哲學の方法に就いて

—西田博士の教を乞ふ—

左右田 喜一郎

—

平素畏敬せる西田博士は最近働くもの『哲學研究第一一五號』及場所『同第一二三號』の二論文に於て多年研讃の結果既に一個の體系を備へたといひ得べき境地に踏み込まれた如くである。此の論文の内に現はれたる思想は所謂學古今を貫き、識東西に亙るといはるべきもので、此等の諸思想、諸學說、諸體系を自家藥籠中のものとなして別に一個独自の境地に進み入られたのを見るは、余をして尊敬の念を深くせしむ

るのみならず、個人的には先輩の友人として博士の爲めに祝辭をすら述べたいと思ふ。凡ての學徒が日々研究を怠らざる所以のものは自足完了の境涯に一刻も早く安住の地を得んことを希ふが爲めであり、西田博士が最早此の二論文に依つて此の如き安住の境地にしつかりと足踏みしめて居らるゝのを見るは、何より第一に欣快の事と曰はざるを得ない。泰西の文物を入れて既に數十年、今にして漸く一西田博士を得た事は我が哲學界の爲めに誠に慶幸といはねばならず、又誇るに足るといはねばならぬ。余は既に其の學説を呼んで博士の名を冠して『西田哲學』と稱するに値する程其の體系を整へたるものありと考へる。無論此の二論文は博士にとつては其の體系を整へるに至つた恐く最初の——劃時的のものではあれ——ものに過ぎぬと考へらるゝが故に、此の際直ちに論理、倫理、美學、宗教等の一々の領域に互つては詳細に説かるゝ所ないけれども、之は今後唯だ時の問題に過ぎないので、要は其の體系の基本をなすに足るべき思想の完成にある。而して之は既に此の二論文によつて達せられたと私には見へる。

依つて此の時期に於て余が西田哲學に對する疑問を展開して博士の教を乞ひたいと思ふ所以のものは、之によつて同憂の先輩としての博士の哲學體系上、いやが上

にも整正を期する爲めに少しでも役立つてほしいとの熱望に基いするものではあるが、他方には西田博士個人及び其の努力に對して滿腔の同情と尊敬と祝意とを表するものなるに拘はらず、却つて其の爲めに純然たる學問上の立場からは西田哲學の確立は學問上一個の思想逆轉に過ぎぬと確信するからでもある。余は個人的に尊敬と祝意とを表すること厚ければ厚き程、従つて之に注意を向くこと多ければ多き程西田哲學が到底學問上容れらるべきに非ざることの疑問を深くせざるを得ぬものである。謹んで博士の教を乞ひたいと思ふ所以である。

二

博士の二論文に表はれた思想及び其の表現の方法は、其の思想そのものゝ複雑の爲めに甚だ難解である。従つて之に對して抱く疑問を展開する爲めに博士の學說を一應余の心中に再生せしむるに際しても甚だ大なる困難を感じる。時には、唯だ言辭上の表現をのみ採るときは、其の眞意なりと思はるゝものに全然反對のものにすら遭遇することも再三再四に止まらない。さりとして疑問を抱持するものが其の對象とする學說を再生せしめ得ざる程ならば疑問其のものも疑問ではあり得なく

なる。何となれば此の如きは全然其の學説を諒解するを得ざるものであるからである。

余は西田哲學を如何に解するやは余の疑問を展開するに當つて必要の前提であり、少くとも余の疑問の關係する範圍及び意味に於て如何に西田哲學を解するやを述ぶるは全く欠くべからざることゝ屬する。

此の意味に於て余は前掲「働くもの及び場所」の二論文に於て、西田哲學が如何なる論據を有するやを検せなければならぬ。勿論如上の困難ある爲めに余の西田哲學の簡單なる再生は博士自身を満足せしめ得ざるべきは豫め余の覺悟する所である。併し兎も角余の西田哲學を解する所は即ち余の疑問——而して其の疑問は博士自身に對するものとして中には相當永い間懷抱したものもあり、又博士と同様の傾向を有する學説に對しては時に深いものもあると自分は思つて居るが——の發する所以でもあるから、余の再生が全然顧みるに足らぬものであれば夫れまであるが然らずして筋道だけでも無理はないと思はるゝ解釋であるならば、余の疑問と照合して誤謬なりとせらるゝ點を指摘して戴きたいと思ふ。夫れも間接に余の疑問に答へられ又余の蒙を啓く一端になることでもある。

余は西田哲學の筋道は次の如きものであると解した。即ち西田哲學は曰ふ。――
 凡そ人の智識の完全なるものは判斷的智識に求めなければならぬ。而して判斷の最も代表的なる形ちは包攝判斷であつて、主語と述語、一般と特殊との關係より之を見れば改めて茲に曰ふまでもなく、主語としての特殊が述語としての一一般の中に包攝せらるゝ關係である。此の場合判斷的智識が最も完成せられたる形に於てある爲めには、主語が述語的に限定せられた意味に於て解せらるゝを要する。然らずんば偶然の二概念が外的に并立するに過ぎない。主語の意味が述語の意味に限定せられ且つ決定せらるゝことを要する。此の場合に之を以て單純に主客合一の狀態を示すものと解すれば、之を合一せるものと解せしむべき「主體」の觀念を要求するに止まるであらうが、之に反して之を以て主語が述語を包んで其の中に自らを自らの内に没入せしめ且つ其の没入を限りなく深め行き「重り合ふもの」と解して行けば、却つて主語たる特殊は述語たる一般を其の内に包み行く立場が考へられ、かくして判斷は具體的一般者の自己限定即ち自己の中に自己を映すといふことによつて成立するといふ意味が明かとなり、判斷が判斷自身を超越するといふことが出来る。

(働くゝの① p. 96) 三

(1) 以下本篇に於ては引用頁數を擧ぐることは凡て避けたいと思ふ位であるが、余が何故此の如く解するやにつき全く典據を示さぬことは却つて誤解を起し易い事だと思ひ、凡て隨處に出て來る博士の思想のみを取扱ひつゝあるものだから思ひながら、其の一二の例を示すものだから曰ふ意味で二論文中の頁數を引用して置きたい。従つて此の點に於て完璧を期するものではない。論文引用に關しては「場所」については其の頁數のみを掲げ「働くもの」については題目を附記して置く。

此の如く自己の内に無限に自己を映すといふことが「知る」といふことの限本義であるが、此く自己の中に自己を映し行くもの、自己自身を無にして無限の有を含むものは即ち眞の我であつて、之は論理的形式によつては限定することが出來ず、却つて論理的形式をも成立せしむべき「場所」とも名づくべきものである。アリストテレスの *De Anima* の中にも曰ふ如く、精神を以て「形相の場所」と考へるが如きものである。此の如き自己の中に自己の影を映す、自己自身を照す鏡とも曰ふべきものは、單に知識成立の場所たるのみならず感情も意志も茲に於て成立するのである。(p. 78) されば我々の認識對象界に於て單に限定せられた一般概念を見るに止まるは未だかゝる場所が自己を限定するに依るからである。場所が場所自身を限定したものは對象化したものが所謂一般概念となるのであるから、知識の對象界は何處までも限定せられた場所の意味を脱することが出來ぬが、情意の映される場所は尙一層深く且つ廣い場所であつて、此等の知情意の全部に共通なる「意識の野」ともいふべき

ものは所謂直覺をも包むで無限に廣がるものでなければならぬ。(p. 20-1)

他方包攝判斷に於て主語が述語の中にあるといふことが映すとか見るとかいふことの根本義である。述語的なるものが映す鏡であり見る目である。(p. 50)されば一切の對象を映すものを述語の極致に求めなければならぬ。(p. 70) 述語は主語を包む、而して其の窮まる所に至つて主語面は述語面の中に没入し、有は無の中に没し去る。此の轉回點に範疇的直覺が成立するのであつて、之を稱して一般概念が限定せられた場所の外に出づるとも云へば、述語的なるものが主體となるとも考へることが出来る。かくして「これまで有であつた主語面をそのままに述語面に没入するが故に」一般の中に特殊を含み、其の特殊は又一般となつて更に其以下の特殊なるものを含み、此くして一般は無限に特殊を含むで、一般が單に「於てある場所」と考へられ、一般的なるものは一般的なるものと、場所は場所と無限に重なり合ふで、一つの立場から高次の立場へと接觸して行くのである。恰も無限に圓が圓に於てある如くである。茲に意志が見られる。此く解すれば主語面が述語面に没入するといふことは、一見矛盾した如く見ゆるが前述べた「特殊なるもの」の中に一般なるものを包攝するといふ意志の意味を含むで來るのである」。(p. 65—6, 70)

此くして判断意識の根本性質は本來意志の根抵にもなければならぬ。判断も意志も無の場所の様相であつて、判断に於ける所謂矛盾の意識なるものは即ち判断の意識から意志の意識への轉回を示すものである。此の意志の界をも超越して純粹状態の直觀に至れば先きに判断の矛盾の超越を経て來たものが、今は意志の矛盾をも超越して眞の無の立場の極限に達する。(P. 50—2, 67)

凡そ包攝判断に於て主語は客觀界に屬し述語は主觀界に屬すと考へられて居るが、此の如き對立を考へ得る爲めには兩者に直接の内在的關係あつて概念の獨立なる一體系存するものでなければならぬ。而して概念の體系なるものは一般が基となつて特殊を含むと考へられるし、又反對に特殊が基となつて一般を有つとも考へられ得るのであるが、通常の意味に於ては概念自身の體系としては前者を採らねばならぬ。此の際一般が特殊を含むと考へるとしても、内面的關係を顧みて行けば一般と特殊とは無限に重なり合ふものであると考へなければならず、而してかく重なり合ふ場所が意識なのである。そう考へて行けば判断に於ける眞の主語は特殊なるものではなくして却つて一般となり、而かも之は抽象的一般ではなくして具體的一般者であり、判断は其の一般者の自己限定といふことになる。(P. 80—1)

我々はかくして一般の上に飽くまで一般を考へ、特殊の下に飽くまで特殊を考へ、此の一般の面と特殊の面とが最後まで並行しながら其の極限に達するとすれば、兩面は無限に接近して合一し、一般は特殊を包むのみならず構成的意義を有つて來、一般は自己自身に同一なるものとなつて來る。茲に於て包攝關係は純粹作用の形をとつて來、述語面は主語面を離れては見られなくなり、無の場所が茲に見られざるを得なくなる。此く述語的なるものが主語となるとき主客合一の直觀といふものが前面に浮び出て來るのである。即ち一般的方向、述語的方向を窮極まで押しつめれば具體的一般者の極限として眞の無の場所に到達せざるを得ない。かくして主客の對立を何處までも固執すれば兎も角、然らざる以上客觀界を包むだ純なる主觀界、體驗の場所といふものに到達することが出来る。特殊と特殊との矛盾的統一も茲では見られ得、一命題中の繫辭の「ある」も存在の「ある」と一致するを得るに至る。此く觀じ來れば判斷の立場から意識を定義すれば、飽くまでも述語となつて主語とならないものといふべく、述語性は實に意識の範疇性といふことが出来るであらう。即ち我々は述語的統一の場所である。述語面こそ我々の意識界である。述語面に包み込まれた主語面は對立なき對象となり之を圍繞するものが意味の世界となる。

意識の内には此くして對象も内在すれば意味も内在するといふようになる。(p. 82, 84, 86, 87, 88—9)

主語面を超えて今述べた如く述語面が廣がる時判断意識を超越するのである。主語がなくなれば判断は成立せず、主語的統一たる本體は之と共に消滅し、反對に述語面には意志が成立する。元來判断の立場は自己同一なるものに至つて其の極限に達するのであるが、其の輪廓線を超ゆれば此の判断自身を意識する判断以上の意識たる意志を見ざるを得ない。此の内的關係あるが爲めに意志の中心は自己同一であるといふことが出来る。茲に自己同一とは主語面と述語面との重なり合ひを意味するのである。是やがて意志我の自己同一でもある。「自己同一の外にあつた意味が自己同一の中に含まれるが故に意志に於ては特殊の中に一般を含むと考へられる。(1)無論それは最早特殊といふべきものではなくして個體でなければならぬ、判断的意識の面から其の背後に於ける意志面に於ける自己同一なるものを見た時すべて個體となるのである」が此の如く見來れば意志は畢竟するに判断を裏返し、たようなものであつて特殊のものが主體となると考へられる。(p. 90, 91, 77)

(1) p. 91 更に p. 49—1, 46 以下 62, 66—8 等参照

更に進んで直観とは一の場所の面が、それが於てある場所の面に合することであつて、而かも夫れは單に主語面が述語面に合一するといふのみでなく、深く前者が後者の中に落ち込んで行くことである。そうして其の極遂に述語面自身が主語面となり終ることである。繰返して曰へば述語面が自己自身を無にして單なる場所となることであり、意識が自ら深く自らの中に落ち行くことである。かくして終極には純なる意識に達するのである。此の如き直観の場所は通常所謂意識の場所よりも一層深い意識の場所であり意識の極致であるから内に超越的なるものをも見得る。是、眞の無の場所に非ずして何であらう。(p. 93, 96)

以上述べたように場所といふものを解して行けば凡そ三通りのものが考へられる。即ち其の一は有が有に於てある時即ち限定せられたる有の場所であつて之は物であり本體であらう。此の有が否定の無に在つて有無對立的に考へられた時の場所は其の二であり此の如きは空間の如きものであり茲に作用が考へられる。其の三は自己が自己を映し、自己の内に自己を包み、凡ての對立も自己の内に自己を深みに沈ましめ行く「眞の無の場所」であり意識の野ともいふべきもので妥當の世界である。

此の絶對無の場所は意志の世界であり直觀の世界である。茲には妥當が曰はれ意味が語られ理想が見られる。更に之が作用として、はなく叡智的實在として、物に先だつて純粹性質が見られ意志は作用としての自由が説かるゝ前に状態としての自由が主張せられる。凡てありの儘に無の中に有は創造せられ、且つ無其のものも本來なくなるが故に、凡てあるものは其の儘に、あるが儘にある。合目的的世界、反省的範疇の世界として純粹状態の世界が見られる。自らが自らを映すも唯だ影のみあり、映す鏡其のものも映される。

凡ての經驗界知識界は此の場所から振り回へつて構成的範疇や其の他の限定を受けたものゝ結果として見らるべきである。カント哲學の意識一般の如きものすらも對立的無と絶對無との轉廻點に位するに過ぎない。意志自由の如きすらも此の立場からは作用として對立的無の場所に映されたものに過ぎない。眞の無の立場の極限に於ては凡ての判斷の對立的統一を超えて矛盾的統一を見るは勿論、意志の矛盾すら超越せられねばならぬ。否意志其のものすら否定せられねばならぬ。

(p. 78) 純粹状態の直觀は其の窮極地である。(p. 51—2)——

若し以上の再生にして詳細の點は兎も角筋道に於て大なる誤りなしとするなら

ば、余は自然に以下述ぶる如き疑問を起さざるを得ぬものである。

二

西田哲學の根本思想は決して簡單なものではない。従つて之に對して疑問を提出するものがあれば恐く數限りないであらう。余は茲に此の如き意味に於ける數限りなき疑問の中の一二を採つて述べんと欲するものではない。余は西田哲學の根本に向つてどうしても其の儘に觸れ得ずに措くことを得ぬとする疑問を述べ、以て博士の教を乞ひたいと思ふのである。

第一に問ひたいことは何故知識に對して意志の上位を認むるかといふことである。(p. 30, 38 etc.)

勿論知識(或は正當に曰へば其の中には「超越的知識」とでもいひ得るものもあらう)には限界がある。知識を知識の範圍内で解し得ぬことは明かである。西田哲學の全班が隨處に知識のみで解釋し切れぬ問題に逢着し且つ其の論文中之に關する凡ゆる學説が咀嚼せられ顧みられて居るから、知識のみによつて吾々人類の精神作用が解釋しきれぬことは何人も諒解するであらう。又意志なる精神作用のあること

は何人も否むを得ぬことであらう。併しそういへばとて、知識の外に意志の範圍があり且つ夫れが上位を占め得るとの積極的主張が何に根據して出て來るか。況んやデューカルトの *Cogito* にも比すべき博士自身の所謂「知る」は意志の又上位にすらありとは博士自身の主張でもある。總じて西田哲學に余が不満足を感ずるは消極的に限界を劃すのみなる批判哲學の境地にいつも積極的の屬性を考へらるゝ事である。消極的の限界を劃すことによつて吾々の思想が満足し切らぬことはいふまでもなく、此の上に積極的の限定を得て此れに導かれて消極的の限界を説くことは便利でもあり思惟の要求にも合し満足もすべき事であるのは曰ふまでもないが、夫れならば宗教上の神や認識論上の物自體 *Ding an sich* を説くものに比して、現在の學問の發達、知識の程度に應じて唯だ手際がよいといふの差あるだけに過ぎない。其の積極的主張が夫れより以下の限界の下にある吾々の思惟に照して「成程尤もだ」と思はしめるだけのことであつて、思惟の境地に於て解釋し切れぬものは意志の然らしむる所なりといふとも、神の仕業なりといふとも、運命の支配する處なりといふても方法論上何等の變はりはない。知識の及ばざる所そは意志のなす所也とするは説明にならぬ。例へば認識に關して *kategorische* 又は *intelligible Zufälligkeit* を以て意志の係

はる所なりとしても、素と々々知識と離れざる以上問題の解決とはならぬ。内面的に問題を形成せる以上位置の優劣上下を以て分離せしめんとすることは、問題の面を歪めるだけに過ぎない。知識の及ぶ範囲と意志の範囲とが儼然上下を劃し得るよう領域的限界あるが如くすることは事實にも反する。知情意の三分説を非常に變形したるものとは曰ひながら根本に於て採用せらるゝは余の解する能はざる所である。

此の意味に於てカントの實踐理性の優位も彼が結極、*Die genaue Zusammenstimmung des Reiches der Natur mit dem Reiche der Sitten*を主張するものとすれば深く考へねばならぬことではなからうか。Cohenもカントに従つて、*Die Übereinstimmung zwischen der natürlichen und der moralischen Teleologie*を主張しながら猶ほ實踐理性として意志の優位を何故に説くやは怪しむべきことである。

此の疑問は今や儼然として文化科學の方法論上に表はれて來た。知識と行爲とを區別するが爲めに例へば文化價値は歴史の規範たるや將又歴史學の規範たるやの問題も困難となる。此の問題は假令歴史學が歴史に合するの境地を考へて除き得べしとしても、自然科學の「價値」よりの自由が概念構成従つて學其のものゝ成立の

終局に至るまで價值よりの自由であるとしても、其の學の成立に求めらるゝ特殊の「價值」が概念構成の事實——又一種の行爲、而して結極文化行爲、歴史行爲——に關しての文化價值と飽くまで別であつて吻合點が全然無いであらうかは疑問であらう。一定の水平線を劃せば上下は限界がつけられる。水平線には限界はつけられない。私は知識の或る點に於ける無能力によつて直ちに轉回して其の有能力のものを意志なりとすることの根據を示して貰ひたいと思ふ。況んや其の有能なるや否やを見るものは結極其の無能力のもの以外にはないのであるからうか。そうすれば無能力ではなくなつて來る。乙を無能力なりとするものは當然有能なるべき非乙があるや否やすら「知り」得ざるに、其の非乙を直ちに甲なりとする理由を聞きたい。意志の上位に疑ひを抱く余は次に述ぶる他の理由と共に考へ合せて現今の倫理學の方法についても深き疑ひを抱くものであることを茲に序に一言して置きたいと思ふ。

第二に西田哲學についての疑問は鮮かに展開せられたる「場所」を以て何故「無」どころかといふことである。

博士の説によれば「何處」までも限定することができないといふ意味にては無であ

るが而もすべての有は之に於てあるものでなければならぬ「*can*」とせられ思惟の對象界に於て限定せられたものが有であり、然らざるものが無と考ふることが出来る「*is*」ともいはれる。又眞に一般的なるものは即ち具體的一般者は自己の中にすべての特殊を肯定すると共に、總ての特殊を否定するものでなければならぬ、………矛盾の統一に於て唯一のものが限定せられるには、この否定的方面がすべての特殊を否定して單に映す鏡とならねばならぬ、斯くして始めて唯一のものを照し得るのである、一般者が無となると云つたのは此意味に外ならない「*働くも*」の「*は*」と主張せられる。皆共に博士が何を意味するやは極めて明白である。

此の場合ヘーゲルにも先例ある如く或る特殊の意味を含ましめて何故「有」とは考へられぬであらうか。一體併し余は此の場合有でも無でも何れでも正しいとは思へない。之も第一と同じ様の考へ方である。有無對立の意味によつて初めて考へ得べきものを其の一方の否定といふ消極的限界を見ながら、其の之を超ゆるや直ちに他方を積極的に考へよとは明かに方法上の欠陥を暴露するものである。凡てを否定すると共に凡てを肯定するものが無であるなら有は何であるか。恐らく無でも有でもないのではないか。而かも之を無と考へるか、意志の場所と考へるか或は

否かによつては全體に頭のもつて行きようが全然違つて了ふと私には思はれる。消極的につめてく行き當たると直ちに轉回的に積極的に何物か出て來るのは私には不思議に感ぜられる。其の場合の獨自性を前の階段下の對立を絶したるものとし、又後に何物の對立も來ることなきように考へよとは私は無理であると思ふ。そういふ風に考へれば前の階段が矛盾なく説明出來るといふだけなら——無論それだけでも容易な仕事とは思はぬけれども、前にも述べた如く畢竟手際がいか惡いかの問題となつて仕舞ふ。西田哲學の意味をこんな處まで墮して了いたくはない。

第三の疑問は「無」の場所の階段に關する。

有が有に於てある場合即ち一般概念的のものを考ふことを離れて、凡ての限定を否定し眞にすべてのものを包む一般的なるものは凡てのものを成立せしむる場所であるから、此の如きは非實在的と考へられ、無と考へられなければならない。併し此の無にも階段がある。例へばプラトンのイデヤの如きものは最高の善の如きものですら猶ほ限定せられたもの、特殊なものと曰はるべきであるから(守)單に先づ或る有を否定した無(守43)として此等は相對的無の場所と曰はねばならぬ。

茲は即ち概念的知識を映すものである。「知識の對象界は何處までも限定せられた場所の意味を脱することが出来ない」が情意の映される場所は尙一層深く廣い場所でないければならぬ」。此の如き場所は直覺の内に包み込まれるのではなく却つて直覺其のものをも包むものであると思はれる。而して凡ての有を否定した無 (p. 43) 即ち眞の無の場所である (s. 20—) こと西田哲學は主張する。

私が茲に疑問としたい點は相對的無の立場を「越えて」(p. 10) 眞の無の立場を考へ得るものが、何故此の眞の無の立場に止まり得て、更に進むで「眞の又眞の無」の場所を考へ得ぬかといふことである。事實西田博士は眞の無の場所の中に二段を考へて總體として無の場所に關しては三段に考へて居らるゝこと前に述べた通りである。即ち所謂直覺に於て既に眞の無の場所に立つのであるが、情意の成立する場所は更に深く廣い無の場所でないならぬ」(p. 21) と曰はるゝが如きは其の一例である。此の思想は余には當然と思はるゝ程隨處に明示的に又暗示的に主張せられて居る。今其の一々を擧ぐる必要はないから論文中の頁數だけを擧げて置かう。(p. 21, 29—30, 34—35, 45, 51—52, 60—61, 62 等参照)

是豈敢て音に三段のみに止まらんやである。カントの意識一般を以て對立的無

から眞の無に至る轉回點にありといふ如く (P. 29, 32, 35) 考へる思想を以てすれば、無の場所を四段にも五段にも六段にも考へ得らるゝ筈である。消極的に否定を重ねて突き詰めるといふことは、一の極限概念を得るに過ぎぬものであるから其の間を何段にでも考へ得らるゝ筈である。西田哲學に於ての如く對立的無の場所に於ては尙作用を見るが眞の無の場所に於ては單に妥當するものを見 (P. 29) といふのであるが、若し假りに此の立場は唯だ單に眞の無の入口にある意識一般の立場にあるものについて言つたに過ぎぬと解して、之に於てあるものは單なる妥當となるのであるが眞の無の場所に於ては、かくの如く妥當するものが存在でなければならぬ (G. 30) と論歩を進めて行き得るが、併し茲で其の論歩を止める必要はないと余には考へられる。更に「其のまた眞の無の場所」が「また其の眞の、其のまた眞の無の場所」では「存在 schlechthin」を考へよとでも何とでも言へるであらう。

此の點はラスクの如き價値の超對立性を説くものについても常に考へらるゝことであるが、余は抑々超對立性を明かならしめんとする思想が、如何にして而して何故に、第一段の超對立性を説くのみによつて直ちに其處に止まり得るかを疑ふものである。ヘーゲルの *Dialektik* に於ても同様に如何にして *Dialektik* の終點を考へ得ら

るゝか余には全く解し得られない。或る任意の點に *Dialektik* の終點を考へよとは、余には反對に其處に何物も考ふるなど曰はるゝよりはむづかしい。

西田哲學の場所は直接に超對立性を説くものといふことは出來ぬかも知れぬが、併し確實なる知識としての判斷から出發し、其の主語的方面を徹底せしむればアリストテレスの所謂判斷の主語となつて述語とならざるものといふものになり即ち具體的一般者となり (p. 35) 其の述語的方面を何處までも押し進めて行けば結局眞の無の場所を得るが畢竟述語的一般者の眞の意味に於ける之亦具體的一般者を其の極限まで導いて行けば茲に到達せざるを得ない (p. 85) とするならば、又主語の方向に於て無限に達することの出來ない本體が見られる如く、述語の方向に於て無限に達することの出來ない意志が見られ……而して其の極主語と述語との對立をも超越して眞の無の場所に到る時直觀となる」(p. 93 又 p. 90, 76 参照) とするならば、

茲に引用した言辭の上では表面上前後多少の矛盾撞着はあるが之は暫く度外視して、兎も角根本的に方法論としては、或者がある、或者がない、といふ二つの對立的判斷に於て、その主語となるものが全然無限定として無となれば、ヘーゲルの考へた如く、有と無とが一となること考へることが出來……而して我々はその綜合とし

て轉化を見る]といふ思想や、續いての記述に「かゝる場合、我々は知的對象として主語的なるものを求むれば唯轉化するものを見るのみであるがその背後には肯定否定を超越した無の場所獨立した述語面といふ如きものがなければならぬ。無限なる辨證法的發展を照すものは此の如き述語面でなければならぬ」(p. 94)といふような考から見れば、少くとも一から他の方向に進むといふことは明かであるから、其の進むものゝ中に其の前のものよりの超越であれ、又は單純なる移動であれ、兎も角其の中の或る一點に於てその働きを突然休止せしめて認むるなどいふのは無理な事である。而して構想豊富なるものは之に應じて幾階段でも其の間に見るに至るべき筈ではなからうか。

此の點の疑問は次の點に關聯して居る。

即ち第四の疑問點は眞の無の場所中に於ける意志と直觀との位置如何といふことである。

「述語をも超越するといふことは無論知識を超越するといふことでなければならぬ」(p. 94)として、知識は眞の無の場所から排却せられ終つて居ることは疑ひない所であるが然らば其の場所に於て意志と直觀とは如何なる關係に立つか、各如何なる

位置を占むるやは西田哲學は説いて未だ詳かでないが、其の間若干の區別あることだけは明である。論文場所の第五節は此の點を明にしようと思圖したものの如くに見ゆるのであるが、遂に充分に解明し得なかつたように私には見ゆる。唯だ先きに意志の上位を説いたと同じく此の意志に對しては又直觀の上位を説いて居ることとは確かである。(p. 52, 62, 97, 99)

然らば眞の無の場所は意志的(?)に解すべきか直觀的に解すべきかは問題とならう。又前段の疑問と同じ様に直觀の上位に更に何物かの上位を説かずして止み得るだらうか。「純粹状態の直觀」は「我々の眞の無の立場の極限」(p. 52)であると考ふることは直觀の場所は所謂意識の場所よりも一層深い意識の場所であり意識の極致である」(p. 96)と考ふることに必ずしも同一ではない。博士は直觀なるものゝ内、感覺的なるものは藝術的對象でなければならぬ」(p. 96)として居らるゝ點より見れば直觀の内にも更に幾多の考へ得べき細別を思ふのではなからうか。然らば「直觀の極致」なるものも更に「純粹状態の直觀」をも超えて考へ得べきであらう。之が眞の無の場所に對する關係やら位置やらはさうなるのであらう。更に意志との關係はさうなるのであらう。眞の無の場所に對して「眞の更に眞の無」「又其の眞の無」といふも

のを説き得ぬかといふ余の疑問は更に根據を得て來る譯である。此くして余の最後の第五の疑問に至る。

余は總じて形而上學上に對して——それが經驗的形而上學をも含ましめての獨斷的形而上學であれ、又 *Contradictio in adjecto* を許さるゝならば近時流行の各種の批判哲學的形而上學であれ——考へらるゝことであるが、凡ては *die blosse metaphysische Übertragung der Erkenntnislehre* ともいふべきものではないかと思ふ。而して我が西田哲學も不幸其の例に漏れぬのではなからうか。勿論其の間精粗の差はある。行論の道行に於て我が西田哲學の如く、古今東西の學説を咀嚼して驚くべき學識と之に伴ふ多年の研究とを兼ねて、誠に我哲學界の誇りともすべき一大體系を完成せるに近いものもあるが、哲學の方法論といふ立場から見れば全然誤れるものなること、猶ほ西田博士の何物をも有せざる俗見の迷信論と擇ぶ處なしと考へらるゝは、余にとつては個人的に限りなき敬意と深厚の祝意とを表せんと欲するだけに痛心の極といふべきである。

知識が知識自らを解せんとする場合には知識を超えんことを要求するは、知識の範圍内に於て妥當する知識にとつて必要且つ當然の歩みに過ぎない。従つて其處

に何物か知識に非ずして而かも知識を制し得べきものを想定して知識を回顧せしめんとすることは恕し得べきことである。併し恕し得べきだけに過ぎない。直ちに理説の根據づけとはなり得ない。

知識が知識を超えんとするは畢竟知識だけの立場であるといふのに誰が言下に否と曰ひ得るか。又知識はデーカルトの *Cogito* をも含めて「即自我」なりとするを何人か決定的に否認し得るか。茲に自殺せんとするものに向つて「人自ら生を斷つは其の人の権利なり」といふか、又は「人の生存するは義務なり」といはふが、其の人の生存する間は疑ひもなく其の人は生きて居るのであるから、自殺の権利を説かうが生存の義務を語らうが、生存の事實其のものに對しては畢竟一個の言辭に過ぎないで其の人の生きてる事實は動かし得ないし、其の人死せば生きて居ないのだから権利も義務もない。而して生は此の場合其の人の全班である。生を共同の「場所」として「盗みすべからず」として盗み若しくは盗まぬのとは全然趣きを異にしてゐる。恰も「世に眞理なるものはない」といふものに對して「然らば夫子の言ふ所も眞理ではないのか」といふて駁するのは、眞理其のものゝ有無を問ふ如き全般を覆ふ問題を、其の全般の内部のみに妥當する形式によつて律せんとするは無理だぞジムメルがいつたにも

類する。

我が西田哲學は此の點をあまりに無雜作に取扱つては居らないか。畢竟理論性の要求を其の範圍を超えて満たして居るのではなからうか。若し満たして居るのだとすれば何處までも方圖もなく進ましめ得るのではないかといつた余の前段の諸疑問も根據を得て來ることになり、是畢竟理論性の僭越を敢てして居るからではなからうか。そして夫れが自殺者の生に對する例の如く「知る」は精神生活の全般を覆ふものとして僭越でないとするれば、意志の優位は説かれなくなり知識も知識を超えたものではなくなる。理論理性の要求を一步一步進めて行つて理論理性自らを超越せしめたら理論理性の要求は妥當しなくなる。死んだものに自殺の権利も義務もない。

西田哲學の取扱ふ所は此の最後の問題である。余は「哲學の方法」として疑なきを得ないのである。余が此の點に關する疑問は西田哲學以外如何なる哲學體系に對して曰はるべきかは識者を俟つて後知るべきには非ずと思ふ。

西田哲學が理論理性の要求を如何に遠慮なく貫いて居るかは一々の語句を引用するを避けて頁數だけを舉げて見よう。論文場所] p. 38—9, 46—7, 55, 62, 76, 84, 90,

93—4 又論文「働く」の P. 119—120, 121, 124—5, 126, 127—8 等。

理論理性が自ら解することを得ざるもの、又は此の如きものあるならば解するを得べしとするものを古今東西の學說を涉獵して悉く之を意志に歸せしめ、更に進むで猶ほ足らざる所を擧げて直觀に屬せしむるは、其の消極的方面に於ては殆んど間然する所ないとは曰へ、未だ遽かに積極的方面に於て承服するを得ざるのみならず「哲學の方法」としては余は力一杯反對したいと思ふのである。

「一般の中に特殊を包攝して行くことが知識であり、特殊の中に一般を包攝することが意志であり、この兩方向の統一が直觀である」(P. 62)と決められ得るならば恐らく何物も解釋し得ぬといふものはないであらう。

「純粹統覺の綜合統一によつて經驗界が成り立つ、之によつて我々は超越的なるものを内在化し、非合理的なるものを合理化することが出来る。合理化せられるといふ以上、その背景に類概念がなければならぬ。……經驗界構成の根本的範疇とも考へられる時の範疇に於ては一々の點が内在的なると共に超越的意義を有さねばならぬ。かゝる時間的物に於てその兩面が合致せざる限り、時の背後に變せざるものが考へられる、即ち主體といふものが考へられねばならぬ。併し右の如き經驗界

の統一が何處までも徹底せられ、時間的なる物の概念が自己自身の根抵に透徹して、その両面が合一した時、物の概念から力の概念に到達せねばならぬ。概念が概念自身の根抵に達する時、數の世界に於て見る如き矛盾的統一が見られなければならぬ、特殊の背後に於ける一般は消え失せて特殊と特殊とが直ちに相關係し、一般なるものは形相から形相に轉ずる場所といふ如きものとなるのである」(働くもの p. 119—120)とか「眞に超越的なるものが内在的となるには、單に經驗内容が時に於て統一せられるのみならず、經驗内容其者が時を含まなければならぬ」(同上 p. 120—)とか、或は又「超越的なるものを内在化し、非合理的なるものを合理化する純粹統覺の立場に於て、時間的物の概念、即ち經驗し得るもの、概念が成立し、かゝる概念的統一を進み行くことによつて働くもの、概念を生じ、遂に主體なき作用の概念に到達せなければならぬ。働くもの、概念の透徹は知るもの、概念に到達せねばならぬ、働くもの、背後には尙内面的ならざる何物か、殘されて居る、知るものに至つては、全く内面的に一より他に移り行くのである、現在から現在に移り行くのである、一瞬一瞬に消え失せることによつて、内面的統一が成立するのである。働くといふことは物が自己自身を知ることであり、知ることは働くことの極致でなければならぬ」(同上 p. 121)

——)とか、更に煩を厭はぬならば「直観は一面に於て、構成作用であり、一面に於て判断でなければならぬ、無限に自己を限定して行くといふ意味に於ては構成作用であり、無限に自己の内に省みるといふ意味に於ては判断である」(同上 p. 124) 又「直観は自ら思惟を含まなければならぬと共に、思惟の徹底は自ら直観に至らねばならない」(同上 p. 125) といふ如きは西田哲學の論構の典型的のものである。一の中に凡て矛盾の他を採り入るゝに徹頭徹尾理論理性の要求に従ひ而して理論理性の権限を超えて獨斷的に形而上學を建設するは——形而上學に獨斷的ならぬものがあらうか——余が之に對して *Die blosse metaphysische Übertragung der Erkenntnislehre* に非ずやと問ふ所以である。西田哲學の「場所」を以て單純なる *Asylum ignorantiae* たるに終らしめたくないとするのは恐らく余一個のみの私情には止まらぬことと思ふ。

余は千九百廿六年の今日に於て再び *Zurück zu Kant!* と叫ぶものがあつたとき場所知らずの、時知らずの聲だといふ批評を聞くのであつたら、寧ろ日本學界の爲めに幸福だと考へる。余は此の古るき叫び聲を西田哲學の一端にだも觸れしめたくないとするのは唯だ余の個人的希望に止まらんことを恐れる。

敢て西田哲學に對する批評といふ程でもない。感想文に近い質疑に過ぎぬが幸

に博士の顧みる所となつて其の文辭の蕪雜且禮なきを咎めず博士の教に俟つことを得ば余にとつて誠に望外の幸福とする所である。

終りに臨み西田哲學體系の完備に向つて厚く祝福の意を表し兼ねて學界の爲めに博士の健在を祈りたいと思ふ。(一五、九、一〇)